慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	技巧的自然 : シラーとプレスナーに見られる教育人間学的諸局面
Sub Title	Kunstliche Natur : Bildungsanthropologische Aspekte bei Schiller und Plessner
Author	Muller, Hans-Rudiger(MAKABE, Hiromoto) 真壁, 宏幹(WATANABE, Fukutaro) 渡邊, 福太郎
Publisher	三田哲學會
Publication year	2008
Jtitle	哲學 No.120 (2008. 3) ,p.145- 170
JaLC DOI	
Abstract	本論文は,2006年3月,学術振興会外国人招へい研究者として来日され,3月8日,文学部教育学専攻と三田哲学会の共催のもと三田で行われたハンス-リューディガー・ ミュラ_(Hans-Rudiger Muller)教授の講演原稿(Kunstliche Natur. Bildungsanthropologische Aspekte bei Schiller und Plessner)を訳出したものである.ミュラー教授は1952年ドイッに生まれ,ゲッティンゲン大学のクラウス・ モレンハウアー教授の下でPh.D.(1990年)および教授資格(1996年)を取得,現在はオスナブリュック大学教育文化科学部の教授である.専門は,18,19世紀の教育思想,人間形成論(ヘルダー研究を中心に)や自伝研究に基づく教育史研究だが,最近では,とくに自伝を資料としながら家族における文化伝達の問題に取り組んでいる.しかし,その関心の中心は,あくまでも広い意味での美的実践と人間形成の関係に関する理論的考察であり,身体や感覚現象と自己の関係に関する文化分析である.本論文では,18世紀後半の美的人間形成論の鳴矢となったシラー『人間の美的教育について』と,20世紀のはじめに独特な感性論・ 身体論をもとに哲学的人間学を展開したプレスナーの人間形成論が比較されている.自然(身体)と理性のあいだに開いた近代的分裂を和解する可能性を「美的なもの」にみるシラーと,このような理想なきあと,たえず「脱中心化」を繰り返していくところに人間の本性と可能性をみるプレスナーのあいだに,近代における美的(感性的)人間形成論の連続性と非連続性をみようとしたのがこの論文である.最後に,ミュラー教授の代表的著作(編著,共著を含む)を挙げておこう.Klaus Mollenhauer (unter Mitarbeit von Cornelie Dietrich, Hans-Rudiger Muller und Michael Parmentier), Grund-fragen asthetischer Bildung. Theoretische und empirische Befunde zur asthetischen Erfahrung von Kindern, Munchen: Juventa 1996(クラウス・ モレンハウアー『子どもは美をどのように経験するか』真壁/今井/野平訳,玉川大学出版部,2001年).Hans-Rudiger Muller, Asthesiologie der Bildung. Bildungstheoretische Ruckblicke auf die Anthropologie der Sinne im 18. Jahrhundert, Wurzburg: Konigshausen und Neumann 1998. Dietrich Cornelie/Hans-Rudiger Muller (Hrsg.), Bildung und Emanzipation. Klaus Mollenhauer weiterdenken, Weinheim und Munchen: Juventa, 2000. Hans-Rudiger Muller, Reflektierte Leiblichkeit. Zum Leibbezug bildender Kulturerfahrungen in Autobiographien um 1800, in: J. Bilstein/K. Bering/H. P. Thurn (Hrsg.), Kultur-Kompetenz. Aspekte der Theorie. Probleme der Praxis, Ober-hausen: Athena 2003, S. 95-113.
Notes	講演
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000120-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

講　演

技巧的自然
——シラーとプレスナーに見られる教育人間学的諸局面——
(Künstliche Natur: Bildungsanthropologische Aspekte bei Schiller und Plessner)

ハンス-リューディガー・ミュラー

真壁宏幹*・渡邊福太郎** 訳

本論文は，2006年3月，学術振興会外国人招へい研究者として来日され，3月8日，文学部教育学専攻と三田哲学会の共催のもと三田で行われたハンス-リューディガー・ミュラー(Hans-Rüdiger Müller)教授の講演原稿(*Künstliche Natur. Bildungsanthropologische Aspekte bei Schiller und Plessner*)を訳出したものである．

ミュラー教授は1952年ドイツに生まれ，ゲッティンゲン大学のクラウス・モレンハウアー教授の下でPh.D.（1990年）および教授資格（1996年）を取得，現在はオスナブリュック大学教育文化科学部の教授である．専門は，18，19世紀の教育思想，人間形成論（ヘルダー研究を中心に）や自伝研究に基づく教育史研究だが，最近では，とくに自伝を資料としながら家族における文化伝達の問題に取り組んでいる．しかし，その関心の中心は，あくまでも広い意味での美的実践と人間形成の関係に関する理論的考察であり，身体や感覚現象と自己の関係に関する文化分析である．

本論文では，18世紀後半の美的人間形成論の嚆矢となったシラー『人間の美的教育について』と，20世紀のはじめに独特な感性論・身体論をもとに哲学的人間学を展開したプレスナーの人間形成論が比較されている．自然（身体）と理性のあいだに開いた近代的分裂を和解する可能性を「美的なもの」にみるシラーと，このような理想なきあと，たえず「脱中心化」を繰り返していくところに人間の本性と可能

* 慶應義塾大学文学部教授（教育学）
** 東京大学大学院教育学研究科博士課程，日本学術振興会特別研究員（教育学）

性をみるプレスナーのあいだに，近代における美的（感性的）人間形成論の連続性と非連続性をみようとしたのがこの論文である．

最後に，ミュラー教授の代表的著作（編著，共著を含む）を挙げておこう．Klaus Mollenhauer (unter Mitarbeit von Cornelie Dietrich, Hans-Rüdiger Müller und Michael Parmentier), *Grundfragen ästhetischer Bildung. Theoretische und empirische Befunde zur ästhetischen Erfahrung von Kindern*, München: Juventa 1996（クラウス・モレンハウアー『子どもは美をどのように経験するか』真壁／今井／野平訳，玉川大学出版部，2001年）．Hans-Rüdiger Müller, *Ästhesiologie der Bildung. Bildungstheoretische Rückblicke auf die Anthropologie der Sinne im 18. Jahrhundert*, Würzburg: Königshausen und Neumann 1998. Dietrich Cornelie/Hans-Rüdiger Müller (Hrsg.), *Bildung und Emanzipation. Klaus Mollenhauer weiterdenken*, Weinheim und München: Juventa, 2000. Hans-Rüdiger Müller, *Reflektierte Leiblichkeit. Zum Leibbezug bildender Kulturerfahrungen in Autobiographien um 1800*, in: J. Bilstein/K. Bering/H. P. Thurn (Hrsg.), *Kultur-Kompetenz. Aspekte der Theorie. Probleme der Praxis*, Oberhausen: Athena 2003, S. 95–113.

シラーの書簡『人間の美的教育について』は，人間形成論（ビルドゥングステオリー）の比較的初期の歴史における最も重要な文献の一つである．美的人間形成に関する諸理論のみならず[1]，子どもの遊びの発達上の意義についての研究や，人間形成における，感性の働きと悟性の働きとの関連性，ないしは，自発性と社会的強制の関連をめぐる議論もまた，今日なお頻繁にこの書簡に言及している[2]．以下で私は，このテキストに含まれるいくつかの中心的な教育人間学的モチーフを取り上げようと思う．このモチーフのテーマとは，後期啓蒙主義における人間学的な議論に特徴的なことがら，すなわち，人間の文化的所産（―個々人に関していえば― 個々人の人間形成）を人間

[1] Mollenhauer u. a. 1996 および Mattenklott/Rora 2004 および Parmentier 2004 を参照．

[2] 最近では Rittelmeyer 2005 を参照．

本性に基礎づけようとする問題である．コンディヤックやディドロ，ルソーといったフランス啓蒙主義がすでにこの問題に取り組んでいた．レッシングもこの問いを重視しており，また，ヘルダーはこの問題が啓蒙主義とその矛盾を反省しつつ形成された人間形成概念を基礎づけるための出発点であるとした[3]．さて，私の主たる関心は，18世紀におけるこうした議論の中でどのようにシラーの書簡が生成展開してきたのかということにはない．むしろ，その書簡が基づいている人間学的な根本的想定を，20世紀における哲学的人間学を背景に再構成することにある．教育学が「美的教育」に関するシラーの構想に対して示した熱狂は，その糧を，実際には次のような主張，すなわち，シラーが今から200年前，つまりブルジョア的な近代的生活様式の始まりに際し，我々が今もなお被っているブルジョア時代の矛盾と緊張を概念化してくれたのだという主張や，美的教育というシラーの理念こそが我々にこの苦しみから逃れる道を示してくれるのだという主張から得ていたといってもいいすぎではない．しかし，その際，近代に伴う苦しみの連続に際し，人間に関する概念や，人間の実存の諸条件や可能性に関する概念が変化してきているという事実に対しては，ほとんど注意が払われていない．哲学的人間学の起源を18世紀に見ないわけにはいかないが，哲学的人間学は，—19世紀から20世紀への変わり目に際しての，社会的-文化的危機という印象のもとで—，人間についてある変容した自己理解を示している．そしてその自己理解から，フリードリヒ・シラーの理想主義的人間学について新たな問いが提起される．私はシラーの理想主義的人間学をわずかな断片の中にたどり直すことによって，まずは人間の「技巧的自然」というシラーの表現を描出し(1)，次にそれを20世紀における哲学的人間学の主唱者であるヘルムート・プレスナーの構想と対比する(2)．次に「役者」つまり「役割演技者」という例

[3] 近代的な人間形成思想の勃興と，啓蒙主義における感覚の人間学との関連については，Müller 1998を参照．

を用いて，シラーとは異なるプレスナーの見解を，実例を挙げつつ論及し(3)，最後に，以上の論述から得られる人間形成論上の成果を簡潔に要約することにする．

1. シラーにおける技巧的自然 —教育的作用を伴う超越論的理念としての美—

シラーによれば，啓蒙主義の矛盾のなかには，歴史的に説明しうる人間の引き裂かれた状態のみならず，人間の現存在一般の普遍的な対立構造も表現されている[4]．一方では有限の存在，すなわち変転する自然の被造物として，他方では合理的に思考し意志する存在として，人間は，自らのうちに基づき，自身の法則性に則って振る舞い，変化し続ける状態のはかなさに耐え抜いて生き残る理性に与っている．たしかに理性へ向かう能力もまた，—あらゆる人間にとっての普遍的な素質として—，人間の自然に属している．しかしながら，それは，ただ潜在性としてのみ自然所与的なのである[5]．理性が自らの潜在性を超え，理性能力として思考と行為のなかで発動するようになるやいなや，理性は自らに固有な真理と倫理への要求

[4]「我々が必然的な存在においては同一不二のものと考える，人格と状態—自己とその規定性—は，有限の存在においてはつねに二つに分かれています」（第十一書簡＝11. Brief, V, 601）〔石原達二訳『美学芸術論集—冨山房百科文庫 11—』冨山房，1997 年，129 頁，参照〕．「人間は変化することによってのみ，現実に存在する．そして不変であることによってのみ，人間が存在するのです」（第十一書簡＝11. Brief, V, 602）〔前掲書，131 頁，参照〕．

[5]「各個々人は，その素質と使命からいえば，自らのうちに純粋な理想的人間を有していて，変化する自己のなかでその不変の統一と一致することが，人間の現存在の大いなる課題なのです」（第四書簡＝4. Brief, V, 577）〔前掲書，95 頁，参照〕．「時間のなかでの自らの現象を，あらゆる時間に適用する法則とすることが，人間の理性的自然によって与えられた使命なのです」，「人間が神への素質をそのものとして自己の人格性のなかにもつことは否定できません．決して目標に到達することのないものを道とよんでよいのなら，この神性への道は，彼の感覚のなかに開かれているのです」（第十一書簡＝11. Brief, V, 45）〔前掲書，132 頁，参照〕．

に従うようになり，人間の感性的な現象に対して距離をとり，さらにはそれと対立するようになる．それゆえ，本来であれば人間における理念的統一としてともに考えられるもの，すなわち，感性と理性能力とは，感性的—物質的な自然と精神的—形式付与的な理性との対立として，人間の生のなかに置かれる．つまり，「素材衝動は人格性を，形式衝動は感受性ないし自然を，それぞれがもともと属する制約の中で保持しなければならないのです」[6]．それにともなって，人間的な自然という概念は，第二の意味を受け取ることになる．つまり，人間的な自然という概念はたんなる中立的な自然法則性ではもはやなく，むしろ道徳性に対する危険な敵対者にさえなるといわれるまでに蔑視されることになる．もし，感性的な自然がその認められた以上に多くの空間を自らのものとするならば，人間は未開で粗野なものとなる．それゆえ感性的な自然は，人間に害を及ぼしてしまう前に，自らの枠内にいるよう指導され，醇化されねばならない．すなわち，「人間は，自らの性向にもすでに，自らの意志の法則を課さなければならないのです．もしあなたがこうした表現を許してくださるのなら，いわば人間は，自由という聖地で物質という恐ろしい敵と戦うことから解放されるためには，物質そのものの領域内でその戦いを遊び楽しまなければならないのです．人間は崇高であることを欲するよう強制されないためには，より気高くあるよう望むようにならなければなりません」[7]．人間の自然的欲望を扱う際，シラーはここで攻撃的な戦争の比喩を用いているとはいえ，このことを人間の自然の抑圧ないし規律化への要求であると誤解してはならない．まさにこうしたことが必要でなくなるために，そして衝動という自然を道徳的理性の要求に実際に対立させないために，人間の感性的自然は自らの領域の中で，文化的に接続可能な形式へともたらされねばな

[6] 第十三書簡 (13. Brief, V, 611)〔前掲書，144頁，参照〕.
[7] 第二十三書簡 (23. Brief, V, 644)〔前掲書，190頁，参照〕.

らないとされるのである（より正確には，理性の形式化する力と自然の生き生きとした力との間の，現実からは解放された自由な遊び，という意味での形式へもたらされねばならないのである）．それにもかかわらず明らかになるのは，「気高い」自然のみがまた「善い」自然でもありうるということである．それとともに，シラーの言語使用でいうところの自然概念の第三のヴァリエーションが関与してくる．すなわち，時間性をおびた人間の現実的状況としての「自然的状態」であり，それは時間の外部でのみ思考可能な倫理的完全性という理念状態と区別される．ここで自然とは，自らの生を完成させていくなかで絶え間なく変化する人間の現実化のプロセスを意味している．そしてこの生とは，すなわち，人間の身体的ないしは現実的な状態なのであり，そのことは人が未開人として振舞おうと，（自らの粗野な自然によってではなく，むしろ制約をもつ理性に盲目的に従う）野蛮人として振舞おうと，もしくはどこかその中間に位置するような性格として振舞おうと関係ない．現実的な状態とは，必然的に欠陥のある感性的-理性的な生の様態のことであって，物質的必然性と道徳的必然性が一致する究極的な（神的な）存在の全体性とは異なっている[8]．

シラーの意味での技巧的自然がどのように理解されうるのかという問題を追求するためには，シラーが人間の自然（＝本性）を説明する際に用いた上の三つの意味の方向性を互いに関係づけながら考察することが必要不可欠であると思われる．すなわち，自らのなかで作用する自然必然性を超え，生を技巧的な道筋と形式へと導くことで，人間の可能性のさらなる分化と特殊化に至るものの，そのことによって同時に，損なわれていない人間の自然（本性）に対し距離を拡げていくことにもなってしまうので，人間という存在は，自然の感性的側面と理性的側面との間の原理的には解消しえない矛盾に置かれていることになる．理念の中でのみ，両者は再び全

[8] 第三書簡 (3. Brief, V, 574)，第十書簡 (10. Brief, V, 599f.) を参照．

体性へと結びつけられる．たとえこの理念が現実化されないとしても，この理念は現実の生に対する一つの統制的機能を有している．つまり理念は方向を指し示し，その方向のなかで，人間は，自分を世界と結びつける感性的実存と，自分を理性の王国と結びつける精神的実存との間の均衡を得ようとすることができるのである．よってシラーは，理念の目的地，すなわち到達できない全体性の手前で，人間的自然を構成している．そしてその全体性とは，人間が自らの本来の自然性に遡り自覚することによってではなく，むしろ自らの自然を技巧的 (künstlich) に，自らの技 (Kunst) を自然なものとすることによってのみ，近づくことのできるものなのである．「我々の課題は」と第六書簡の終わりで書かれている．「技が破壊してしまった我々の自然のなかに，より高次の技によってこの全体性を再び打ち立てることである」[9]．このより高次の技によって，我々は全体性の一歩手前まで概念的には接近することができるが，この技こそが美の技であり，美的経験なのである．この技は，未開な自然の諸衝動からも，また同様にたんなる理性の諸衝動からも我々を解放する．そして，この技によって，我々は，この美的経験に，そしてこの美的経験にのみ特徴的な，積極的で実質的 (realer) な規定性という状態にとどめられる．感性と悟性はそれぞれの仕方で活動し，その際，相互に妨害することはない．なぜならば，感性と悟性とは自由な主体の意志に従いながらも，なお，各々の時々の諸要求を保持しているからである．このことが成立している限りにおいてのみ，シラーは活動する自己（理性主体）について語る．というのも，この自己は理性の必然性にも自然の必然性にも屈することなく，むしろ，この両者の真価を，その自己の統制的活動を通じて，それぞれ相手の地平

[9] 第六書簡 (6. Brief, V, 588)〔前掲書，111 頁，参照〕.

において発揮させるからである[10].

シラーの人間学は以下の諸点にまとめられる.

—自然と理性は人間において作用する力である. それぞれの力は, 各々の領域のなかで, 各々の法則性に従い作用する. そして自然と理性とはともに対立に陥るのではなく[11], 物質でも形式でもない自己が, 不均等に割り当てられた諸力が原因で, 偶然に対立へと陥るのである. より厳密にいえば, 人間における二つの力ないしは衝動が作用するそのバランスと対立するに至るのである. 主体の活動性, すなわち主体の力とは, まさにこれら二つの力のバランス規定そのものに基づいている. シラーが自らの人間像を構想するのは, この超越論的な主体からであり, この主体に自然と理性という互いに綿密に区別された領域が対置されている. 人間は自らの理性能力によってはじめて, 自らのなかで作用する自然に

---

[10]「両衝動（素材衝動と形式衝動; 引用者）はともに, 前者は自然法則によって, 後者は理性の法則によって, 心 に強制を加えています. これら両衝動がそのなかで結合している遊戯衝動は, 同時に心を道徳的かつ自然的に強制することになるのです. しかし遊戯衝動はあらゆる偶然性を廃棄するために, あらゆる強制をもまた廃棄し, 人間を自然的にも道徳的にも自由にすることになるのです」（第十四書簡＝14. Brief, V, 613）〔前掲書, 146 頁, 参照〕.

「したがって, 意志は両衝動に対して力（現実性の根拠）として関係しますが, 両衝動はいずれもそれ自体としては他の衝動に対して力として関係することはできません. […] 人間のなかには自らの意志以外の力は存在しないのです […]」（第十九書簡＝19. Brief, V, 630）〔前掲書, 169-170 頁, 参照〕.

「感性的衝動は, 生の経験とともに（個体の始まりとともに）目覚め, 理性的衝動は法則の経験とともに（人格性［自己意識; 引用者］の始まりとともに）目覚めるのです. そしてこれら両者が存在するようになってはじめて, 彼の人間性がつくりだされます. このことが起こるまで, 彼のなかのあらゆるものは必然性の法則に従って生じます. しかしいまや, 自然の手は彼を見捨て, 自然が彼のなかに置き, 開示したかの人間性を主張するのは, 彼の問題となるのです」（第十九書簡＝19. Brief, V, 631）〔前掲書, 171 頁, 参照〕.

[11]「これらの傾向が矛盾しあうことは間違いないでしょうが, 注意すべきなのは, 両者は同一の対象において矛盾するわけではなく, 出会うことのないものは衝突することもできないということです」（第十三書簡＝13. Brief, V, 607）〔前掲書, 138 頁, 参照〕.

一つの形式を与え，自らの自然に基づくことではじめて，形式を与える意識にその素材を提供する．シラーの観点からすれば，ここに避けることのできない人間の自然の技巧性がある．

—シラーは超越論的な主体に，こうした力と責任を割り当てたが，同様な力と責任を経験的自己に任せることはできないということが明らかになる．理性と感性とをしっかりと調和のとれたバランスのなかに位置づけ，人間の失われた全体性を再び回復させることのできる主体は，理念においてのみ考えることができる．したがって，人間の技巧的自然は，達成不可能である絶対的調和という目的へ方向づけられており，それによって規定されている．そこから逸脱してしまうもの全ては（また，どんな人間の可能性もそこから逸脱してしまうのだが），欠陥の汚点を運命づけられている．人間性という純粋概念だけが，諸力の全般的な調和を可能にする．人間を個別的にするあらゆるものが，同時に人間を不完全なものにする[12]．

—ある経験の様態のみが，バランスのとれた調和という理念へ接近する．その様態とは，美的な状態のことであり，美の感受である．たしかに，美の経験もまた（美の理念とは異なって）完全なものでも，堅固なものでもない[13]．しかしながら，美の経験はそれが美の理念を志向することによって，理念を直観へともたらす．形式衝動と素材衝動は，芸術作品において収斂し，「生ける形態」を生み出す[14]．美の経験は，「安らかな形式」によって「未開の荒々しさ」をなだめ，感性的な力と感情によって思考を生気づける．美の経験だけが，自らの外部に存在する現実的な

[12]「経験が人間に示しているように，人間においては，それ（美；引用者）は，すでに汚されていて自らに対抗する素材を見出します．この素材は，人間が個人的な性質を混入するのにまさに比例して，美からその理想的な完全性を奪ってしまうのです」（第十七書簡＝17. Brief, V, 623）〔前掲書，160頁，参照〕．

[13] 第十七書簡（＝17. Brief, V, 623）〔前掲書，158-162頁，参照〕を参照．

[14] 第十五書簡（＝15. Brief, V, 614）〔前掲書，148頁，参照〕を参照．

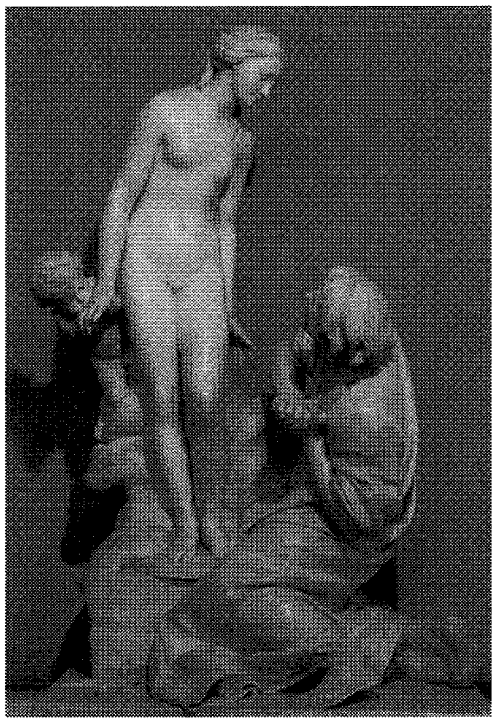

図1　Etienne-Maurice Falconet:
Pygmalion und Galatea, Marmor, 1761; Paris, Musée du Loubre

ものに対して距離をとるからこそ，このことを可能にする．美の経験は，現実の人間を善くするわけではなく，また彼に真理を提示するわけでもない．美の経験は，現実的な状態にある人間の欠損様態から人間を解放することによって，人間にその方向性だけを示す．したがって，美的経験は，ひとつの統制的理念，すなわち「技巧的自然」としての人間存在やその状態に規範を与える理念を想起させるのである．すなわち，全体性への要求を想起させるのである．

シラーのこの見解は，同時代の芸術作品の中で具体的に示すことができる．

ファルコネの大理石像『ピグマリオンとガラテイア』（図1参照）は，1761年に制作された．この大理石像はシラーが「生ける形態」と名づけたものを，二重の意味で示唆している．まず，物質としての大理石の重み

について，それを鑑賞者が知覚することはない．この重みは「動きのある」形態において止揚されている．他方，美的な形式としては，「手なづけられた感性」を表現している．同時に，構想力の戯れもまたこの作品のテーマであり，というのも，この作品のテーマが古くからの神話を示唆していることによる．その神話によれば，ピグマリオン，すなわち彫刻家は，自らが大理石から生み出したガラテイアに惚れ込み，アフロディテが彼の願いを聞き入れ，像が生命を得る[15]．生の衝動と形式衝動は調和的な結びつきへと至り，そのことによって人間の失われた全体性が具体的に表現されているのである．

2. プレスナーにおける技巧的自然 —人間存在の可能条件としての媒介された直接性と自然的技巧性—

シラーは人間実存の緊張をはらんだモデルを構想することで，18世紀における啓蒙主義の矛盾に応える．そのモデルは美と調和という超越論的な概念によって支えられ，いわば規範化されている．他方，プレスナーもまた，20世紀において自らの人間学的構想を，人間の生の超越論的規定の上に基礎づけている．だがその際，プレスナーの構想は，人間の異質な諸力，すなわち一方で感情的で衝動的な自然と，他方で理性の能力とをともに結び合わせるような理想状態へと向かうことはない．すなわち，人間が自らの普遍的規定に従って，いかにあるべきかという理念へ向かうと同時に，自らに特有な欠陥性のなかで何が人間に存在すること一般を可能に

[15] ここでは啓蒙哲学において好んでよく用いられるモチーフが扱われており，このモチーフはとりわけ感覚主義的なヴァリエーションのなかで，心身問題をめぐる問題として扱われている．エティエンヌ・ボノ・ド・コンディヤックは，ある思考実験のなかで，生命を得たガラテイアの例を用いて説明を行っている．ガラテイアに徐々に個々の感覚を付与し，それら様々な感覚が精神活動の構成に果たす役割を考察しているのである．Condillac 1983 を参照．また脚註18のヘルダーへの註も参照のこと．

しているのかという問いへと向かう．現象的に見れば，（その他のいかなる自然の本質とも比較しえない）並外れた無類性を本質とする種として立ち現れるような，こうした感性的-理性的被造物が自然のなかに存在することの，可能条件とは何か．プレスナーは，シラーと似た問いの方向性によって，人間についての哲学的議論と科学的議論の分裂に応答するのである．しかしながら，ここでいう分裂とは，当然のことながら，とうの昔に啓蒙主義の矛盾のなかで明るみに出され，シラーの思考を駆り立てた，思弁的理性と主体的経験の対立のことではもはやなく，自然科学の対象としての人間と，精神科学の対象としての人間という19世紀末に特有な人間の区分のことである．前者は自然存在としての人間の因果的規定を担うのに対し（その際，人間の技術的な使用可能性への期待を抱いている），後者は歴史的な人間，すなわち，人間によってつねに新たなヴァリエーションが生み出される文化的所産と意味形象との関係に制限されている（その際，人間の現存在の意味と意味を担うものに関する理解への期待がそこには含まれている）．プレスナーは，人間に関する考察を規定する，これら二つの学問的伝統の方法的かつ対象理論的な境界線を超えようとする．しかもプレスナーは，それをこの二つの学問伝統のなかで行おうとする．すなわち，人間を身体的-精神的二重性に置き，その表現の多様な形式を生み出すことになる人間の自然的規定性を，超越論的立場から自然の構想を探求することによって，この試みを行おうとするのである．

プレスナーは自らの考察を，世界に対峙する超越論的主体としての自己ではなく，世界における人間の位置，すなわち自らの環境領野との関係における，また自らのこの関係との関係における人間の独特な位置から始める．プレスナーは次のように述べる．「三重の事態が存在するのだ．生きたものは，〔まず〕肉体であり，〔次に〕肉体のなかに（内的生命または心として）あり，〔最後に〕眺望点として肉体の外にある．この眺望点から見ると，生きたものとは前二者のことである．位置的にこのように三重に

特徴づけられている個体が，**人(格)**とよばれる」[16]．これまでなんら問題のなかった世界との関係が，何らかの機会に妨げられるとき，我々は**肉体である**ということが意識される．たとえば，我々は，食卓の角にぶつかって足に痛みを感じ，普通に歩くことができなくなる．我々が**肉体のなかにある**ということを，我々は心理的状態によって感じる．その際に強調すべきなのは，その心理的明証性，すなわち怒り，喜び，悲しみ，落ち着き，もしくは，その他の我々の内面的な現象が身体的な状態に相関しているということである．たとえば，我々は，腹部に怒りを，胸に喜びや悲しみを，そして心の軽やかさとして落ち着きを感じる（これらにしても，複雑な身体的事象のための比喩的で，もってまわった表現でしかない）．しかし，我々は肉体であり，そして肉体のなかにあるだけでなく，我々の肉体の外にもあることが明らかになるのは，ある同一の現存在が相互に区別しうる観点として肉体と心をもつことを知る時をおいて他にない．というのも，その時，我々は，自身の生をただ生きるだけでなく，潜在的な距離をもって生に対してもいるからである．我々は，我々の実存の中心で生きているだけでなく，いわば自らの背後に（脱中心的な位置に）立っており，自らを観察し，自らの肉体とともに，またその中で生じることについて判断を下し，そのために行動する．プレスナーはここに根本的な二重性を見て，人間の存在の止揚不可能な矛盾の根拠をみている．なぜなら，脱中心的に位置づけられているということとは，生の遂行にともなってつねにすでに分裂しているということ，しかしそれでもやはり，生の遂行に構成的に関係しているということを意味するからである．

ここにはモデルの三角構造に関して，シラーとプレスナーとの類似性が見られるが，それは表面的なものでしかない．というのも，プレスナーはまさにシラーとは異なり，心的状態ならびに自然と，倫理的能力ないしは理性と，これら両者の関係を監視する自律的な自己を区別してはおらず，

[16] Plessner, IV, 365.

むしろ（プレスナーにおいては，シラーとまったく異なって，肉体，心身相関的内面世界，精神に基礎を置く脱中心性から，この三つの構成要素は構成されている），これら三つの構成要素を，それ以上遡ることができず互いに制限しあうものと捉えていたからである．これらの構成要素は，我々の身体所有的-心身相関的-精神的現存在の観点のことなのである．そしてこれらの要素は，視点としてのみ互いに区別されるものの，その他の点では専ら，―ひとつの全体に混ざりあうことはないものの―，それらは共在し，相互関係状態にある．人間の生はこうして，初めから二律背反的な構造を持ち，自己もまたこの構造から逃れることはできない．自己は，純粋には，自らと一致しない．自己は生を意のままにすることはできないが，生を遂行し，つねに媒介された直接性と自然的技巧性の中で生きている．自己は自らの現存在の身体的な基礎を飛び越えることもできなければ，自己自らの消滅という対価を払わず，自己がかつて置かれていた自由から逃れることもできない．人間のあらゆる生は，和解と調和の見通しもないまま，このあいだの領域で生じる．

とはいえ，差異のこの幾重にもわたる交差は，同時に，人間が自らの現存在に文化的形態を付与することを可能にするのであり，表現や具現化(Verkörperung)の形式の多様性の基盤でもある．プレスナーにおいても，人間の自然が「技巧的自然」であるということは，この点で，たんに抑圧的であるだけではなく，人間の生の形式がもつ無限の多様性を創り出す機会が与えられていることも同時に意味している．言語，社会と文化，労働と技術，学問，芸術，宗教などは，人間の現存在を具現化した諸形式であり，これらを互いに序列づけて考えてはならない．これらは人間の技巧的自然のそれぞれ独特な表現形式であり，そこからどんな危険と成功の見込みが人間に生じてくるかは完全に見通せないとしても，それらは各々人間が自らを解釈する行動領域を表現している．たしかに人間は，不安定な実存，すなわち自らに対して決して十分に透明ではなく，自らの人格と

自らの有機体との絡み合いのなかに置かれ，つねに自分自身とは異なる存在であり続ける他ないのだが，自らの生を具現化する存在ではあるのだ[17].

プレスナーは，人間という種の具現化を，とりわけ人間の自然の一部としての感性の点から探求する．プレスナーにおいて，感性の領野は，シラーのように形式衝動に対する対抗力として構想された素材衝動のための物質的貯蔵庫であるのではなく，自発的に構造化しつつ，人間の自己との関係と世界との関係にも作用し，それゆえ諸可能性の余地という意味で，すでに人間による行動的な形態化に先行する領野であることがわかる．それゆえ，プレスナーはまた，個々の感覚領域とそれらのそのつどの独特な具現化機能に強い関心を寄せる[18]．たとえばプレスナーは，それら固有の領域がもつ特質を求めて，視覚と聴覚について探求している．感覚としての視覚によって我々は外の世界を自らに対する距離のなかで知覚し，認識と行為の領野としての我々の視線が有する合目的性が明らかとなる．感覚としての聴覚にはこの「固有な遠さ」が欠けており，我々が背を向けている時でも可聴世界を聞き取らせ，物音や，声や，響きを主として我々のなかに浸入させる．その響きが何か外的なものを告げ知らせるものとして，たとえ距離をもって聴覚に現れるとしても．プレスナーは，具現化の特殊な可能性領域としての様々な感覚領域にある構造的特質を探り出すため，

---

[17]「持続的ではあるが，不可視な行為者としての人間の種は，[…] 具現化なしに自らを表現すことはない．[…] 個々の人間は，自らの種にとっての具体例であるだけではない […]．個々の人間は多かれ少なかれ歴史的な存在である．というのも，人間であるということは，単に人間性を意味するだけでなく，つかんだり，逃したりする可能性を孕むチャンスも意味しているからである」(Plessner, VIII, S. 140).

[18] プレスナーはここで18世紀後期における感覚人間学の議論を取り上げているが，ヘルダーはそれをシラーよりも早い時期に見出している．ヘルダーの“Viertes Wäldchen”(1967a) とその中の論稿である“Plastik. Einige Wahrnehmungen über Form und Gestalt aus Pygmalions bildendem Traume”(1967b) を参照.

諸芸術の差異を重視する．他方，シラーは，諸芸術の差異を，美という理念的概念では止揚される具現化自体の不完全さを示すものと捉えている[19]．

プレスナーは彼の「感性学〔Ästhesiologie〕」によって，いわば芸術の領域におけるあの展開に対し，いわば理論的論評を行っている．その展開とは，芸術の歴史において18世紀に次第に進展してきた，芸術の自律化と呼ばれているものである．たとえば絵画は，19世紀後半に形象的な描写機能から解放され始め，視覚経験を探求するための媒体となった．シラーの時代に造形芸術を規定していた擬古典主義的な美はその意義を失い，視覚経験の構成条件としての形と色彩との戯れが前面に出てくる．見ることの慣習的な技巧性は，ひとつの感性的技巧性へと変化し，それに伴い，もうひとつの経験様態が開花する．この新たな視覚経験は，人間をより一層本来の自然へと近づけるものでも，完全性という理念的状態へと近づけるものでもない．この新たな視覚経験は，人間をただ，その固く結びつけられた慣習的-同定的視覚の諸形式から解放し，人間に，未規定で，したがってこの点ではプレスナーとシラーとは一致しているのだが，自由で活動的に規定可能な視覚の状態を繰り返し開示するのである．

以下の三つのセザンヌの絵画は（図2-4参照），1902年から1906年の間に描かれ，ひとつのシリーズをなしている．そのシリーズのなかでセザンヌは，くりかえし，たいていは同じ視点から，プロヴァンス地方にあるサント・ヴィクトワール山を描いている．まさに連続的な比較が，何が重要であるかをよく示している．すなわち重要なのは，自然の美を可能なかぎり理念的に呈示することではなく，視覚の物質性への反省と，再帰的につねに自らに立ち戻る視覚において我々がなす経験なのである．

[19] 第二十二書簡 (22. Brief, V, 639f.) を参照.

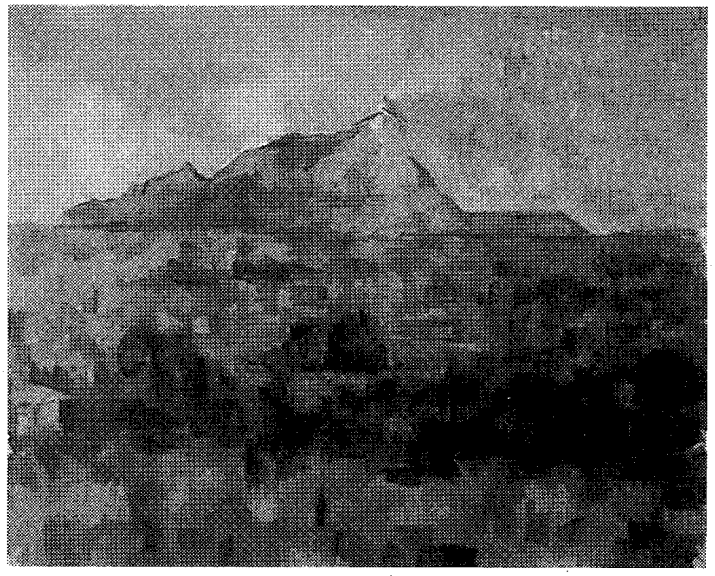

図2　Paul Cézanne:
Die Montagne Sainte-Victoire, von Les Lauves aus gesehen. 1904/06, Öl auf Leinwand, Privatbesitz

図3　Paul Cézanne:
Die Montagne Sainte-Victoire, von Les Lauves aus gesehen. 1902/04, Öl auf Leinwand, Philadelphia Museum of Art

図4　Paul Cézanne:
Die Montagne Sainte-Victoire, von Les Lauves aus gesehen. 1902/06, Öl auf Leinwand, Kunsthaus Zürich

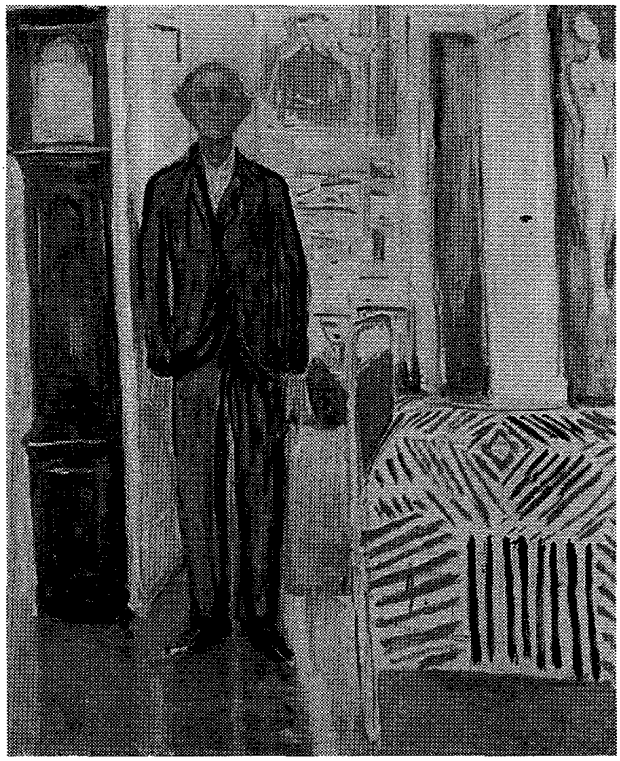

図5　Edvard Munch:
Selbstbildnis. Zwischen Uhr und Bett, um 1940, Munch-Museet Oslo

3. 役　者

人間存在と人間の技巧的自然の根本形式である具現化を説明するもう一つの事例を，プレスナーとともに役者にみることができる．この事例の長所は，これによって我々が美的経験というシラーの概念により近く接近できるという点にある．というのも，劇作家としてのシラーは，絵画よりもむしろ演劇に親近感をもっており，さらに役者が引き受けるところの役割という概念，ならびに，シラーの美的教育についての**書簡**が有する社会的，政治的な視点を開示するからである．この役割という概念を，その社会学的に拡張された意味において理解するならば，個々人はこの役割のなかで一人の社会的行為者となる．そして，そこで自律性と社会的規定性とが互いに交差し，人格と国家や社会との関係が視野に入ってくることになる[20]．役者の役と我々が絶えず演じる社会的役割とのこの結びつきは，プレスナー自身によってはっきりと意識されている．役者は自らの肉体によってある役割を具現化する．彼はその役割を普段は（あるいは少なくともそのようには）引き受けてはいない．しかし，この〔演ずるという〕状況の明白な技巧性ゆえに，人間としての自己と社会的形態での具現化との間で，つねにいつも生じていることが明らかになるのである[21]．

役者に特徴的なこととは何か．役者は，その役が規定しているものへと，ある一定程度まで，自分を作りかえる時にのみ具現化が可能になるような役を**演じている**．逆にいえば，表現すべき一般的な行動様式を，自らの人格でもって現実化することによって，**役者**は役を演じている．「そのなかで彼の個性が開花し，同時に消えていく役柄に支えを持っていること

[20] これについては，Mead 1968 に基づいている．1934 年にアメリカで出版された彼のオリジナル版を，プレスナーはすでに知っていた．

[21] プレスナーに関する，すばらしい人間形成論的，アイデンティティ理論的解釈を Thorsten Kubitza (2005) が提示している．

が，決定的であり続ける」[22]．舞台上で役者は，役を担う者であると同時に，役柄上の人物でもあるという二重の実存の中で，役を演じる．すなわち，この両者が目に見え，完全に分離することがない時，彼はまさに説得力をもって演じていることとなる．そして，まさに，日常生活においても事態はそうなのだ．「彼（役者；引用者）は，自分自身への関係としては，自分にとっても，観客に対しても役を担う人格である．もっとも，この関係性のなかで，役者と観客は，それぞれ自らに対する距離と相手に対する距離を反復するだけなのだが．この距離は，彼らの日々の生活を貫いている［…］」[23]．人間はいつでも，自分が持ったり，他人が自分について持ったりするイメージを模倣する．「人間は自らをまねる．人間は他者を通じて彼自身となる」[24]．しかしながら，まさにこのことによって，人間と，人間が自ら作り出したイメージとの間に，また，役を担う者としての彼と役との間に裂け目が生じることになる．人間は，自ら自身に対する距離を単純に受け取ることはなく，この距離に対し関係し，自らが自らに関係する．ここに，具現化と最終的には生活様式の無限な多様性が生まれる理由が認められる．「この自分自身に現前する存在には分裂がある．そして可能な限り自己を差異化する『場』が存在する．この『場』が人間に選択を強い，可能性を生み出す力として，独特な現存の仕方，すなわち，［…］脱中心的な［…］仕方を，人間に指示する」[25]．

役を担う者と役上の人物との間のこの弁証法は，不可避的に二重の存在として人間を規定し，動的で過程的にしか思考可能でない，私性と公共性の間のバランス化をつねに新たに要求してくる．それと同時に，そのことによって，私的なものや個人的なものの活動空間を脅かす「共同体の境界

[22] Plessner, VII, 405.
[23] 同上，411.
[24] 同上.
[25] 同上.

線」[26] が画定される．プレスナーがシラーやドイツ観念論に対してとっている歴史的距離からすると[27]，理想的，道徳的な共同体というイメージ，すなわち，そこにおいては，「個人が国家となり」[28]，「性格の全体性」[29]が多様性と統一性との間の差異を止揚することになる，そうしたイメージは問題含みの理念，少なくとも政治的にたやすくその反対物へと転化してしまうような理念であることが判明する．歴史が教えているように，全体性という理念を全体主義的理念へ曲解するためには，到達不可能な理念の領域から得られるそうした理念を，政治的現実の領域へ移行させるだけでよいのだ[30]．止揚不可能な「人間の現存在のイメージ規定

[26] Plessner, V, 7，参照.

[27] プレスナーは次のように述べる．「シラーが人間の二重の性質を対立し合うものと定式化し，芸術にその和解の方法を見たようなやり方にしがみつくのでないとすると，そして，そのような古典的理想に従うのでないとするならば，二重性を帯びた対自存在の解明のなかに，人間が何でありうるのかに関する示唆くらいは含まれてないかどうかと問うぐらいはゆるされるだろう」．この言い方でプレスナーが考えていることは，「つかめるだけつかめ，という産業的な誇張表現の持つ雰囲気」の対極に位置する，「どんな論理や制度化にも［矛盾する］［…］，心の質」のことである．(Plessner, VIII, S. 336.)

[28] 第四書簡 (4. Brief, V, 577)〔前掲書，95頁，参照〕.

[29] 第四書簡 (4. Brief, V, 579)〔前掲書，98頁，参照〕.

[30] シラーがまさに経験的個人を，理想的（道徳的）国家という表象を伴う国家によって抑圧しようとすることに対し，戦おうとしていることは，第四書簡における議論の筋からだけでなく，最終書簡の結論部分からも明らかである．「それゆえここでは，すなわち美的仮象の国においては，狂信者がなにかにつけて本質的に実現していると思いたがるような，平等の理想が達成されている［…］」（第二十七書簡＝27. Brief, V, 669）〔前掲書，223頁，参照〕．シラーは少数エリートのサークルのなかにのみ，「美的仮象の国」「への要求」だけでなく，「への行為」（同）までもが実現する契機を見ている．しかしながら，そのようなサークルの持つ排他性は別にしても，社交的な交際のせいぜいひとつのモデルといったものが，共同体と国家との全体的な発展を与えることはできない．そして個人と社会との間の差異を美的な国家において止揚するという目的は，個人と共同体の展開地平が，目的論的閉鎖性（まさに開放性ではなく）へと収束する問題含みの傾向をもっており，この傾向が，シラー美学の社会批判的力に力を与えている．

性」[31] というメタファー的表現（「イメージ」）は，もう一度別な媒体をつかってこのことを例証することを誘う．すなわち絵をつかって．この絵（図5参照）は，エドヴァルド・ムンクによる77歳頃の自画像である．この絵は，自らの実存の様々な屈折のなかで，人間であり，また絵描きであるムンクを示している．垂れ下がった手足と，それとすぐわかる老齢とに，描かれている人物の疲れとやつれが表現されている．この人物は自らの実存の身体的な基盤をあからさまに表現している．彼は直立する力をまだ有してはいるが，この人物の姿勢には，すでに自らの避けえない死が予告されている．おびただしい数の絵で埋められた彼の周わりが，画家としての社会的役割を示しているものの，この描かれた人物は，その役割を満たしてはいない（彼の両手はだらしなく垂れ下がり，ピンセルもパレットもつかんではいない）．この人物の指示対象，すなわち自らの自画像の画家としてのムンクは，まさにそのことを行っている，つまり絵を描いているにもかかわらずにである．彼は自分を描いているのか？　垂線の強調が目立つが，それはほとんど絵画空間を垂直にゆがめるように，もしくは，描かれた人物がいわばピンと貼り付けられた力の場であるかのように作用している．人物とその周りとの間の色彩の対応関係によって，その印象は強められる．この対応関係は，人物と彼の周りの間の境界をなくしてしまうわけではないものの，自己と非自己との間の移行や戯れを示している．画家は，美的–芸術的活動という距離化のなかで，自らの自然的技巧性と技巧的自然の弁証法に視覚的に取り組んでいるのだ．ムンクの絵はこの取り組みを終結へもたらすことはない．むしろ，その取り組みが行われ，その取り組みを引き続き行うことを鑑賞者に喚起するような場を示すのである．

[31] Plessner, VII, 417.

4. 結論　―人間形成論的まとめ―

シラーは18世紀末に力説された人間形成(ビルドゥング)概念に従っている．人間的自然を美的に洗練させるなかで，この自然は，粗野な状態から人間理性との相互関係へ移行し，自由となり，すべきことを欲し，欲することをなすようになる．ここに人間形成の理想的な事例をみることになる．人間にとって到達不可能な目的とは，自然的必然性と理性法則との絶対的な調和，すなわち，あらゆる対立の和解である．プレスナーはシラーの人間学的諸問題の筋書きを，ある仕方で受け継いではいるが，三つの主要な点においてその基盤を変更している．第一に，自然と理性とは，それぞれの固有領域において作用し，その後で，超越論的自己によってようやく調停されるのではなく，むしろ自己は，身体存在(Leibsein)と肉体所有(Körperhaben)の弁証法において，いつもすでに葛藤をはらみながら，全人的人格と交差している．第二に，プレスナーは，シラーにおいて美的な状態に限定して方向づけられた，人間存在における人間的なものへの導き方を，人間の文化的表現形式のヒエラルキー的ではない多様性へと拡張する．そして第三に，プレスナーは慰めに満ちた考え，すなわち，人間が生きていくなかで失われた全体性を再確立するという理想に代えて，それ以上遡りえない非同一性という命言と，自己異質性という危険ではあるが同様に生産的でもあるような観点を示唆するのである．

プレスナーは，人間の完全性という理想に強調点を置くシラーの人間形成概念に代えて，自己形成する主体の，存在の諸構造の幾重もの織り込みに視野を開き，また，この過程に先立って与えられる目的方向性が歴史的-文化的偶然性にゆだねられている事態に目を開かせる．プレスナー人間学は，人間と，カントのいうところの「定言命法」の和解を目指してはいない．それは，人間を仮借なき「定言接続法 kategorischen Konjunktiv)」

に委ねるものなのである[32].

文　献

Condillac, Etienne Bonnot de: *Abhandlung über die Empfindungen* (1754), hrsg. v. Lothar Kreimendahl, Hamburg 1983.〔加藤周一，三宅徳嘉訳『感覚論』創元社，1948年.〕

Herder, Johann Gottfried: *Kritische Wälder. Oder Betrachtungen über die Wissenschaft und Kunst des Schönen. Viertes Wäldchen: Über Riedels Theorie der schönen Künste* (1769). Im: ders: Sämtliche Werke, Hrsg. v. Bernhard Suphan, Berlin 1877ff (Reprint Hildesheim 1967), Bd. 4 (1967 a).

Herder, Johann Gottfried: *Plastik. Einige Wahrnehmungen über Form und Gestalt aus Pygmalions bildenden Traume* (1778). In; Ders., Sämtliche Werke, hrsg. v. Bernhard Suphan, Berlin 1877 ff (Reprint Hildesheim 1967), Bd. 14 (1967b).

Kubitza, Thorsten: *Identität, Verkörperung, Bildung. Pädagogische Perspektiven der Anthropologie Helmuth Plessners*, Bielefeld 2005.

Mattenklott, Gundel / Rora, Constanze (Hrsg..): *Ästhetische Erfahrung in der Kindheit. Theoretische Grundlagen und empirische Forschung*, Weinheim und München 2004.

Mead, George Herbert: Geist, *Identität und Gesellschaft. Aus der Sicht des Sozialbehaviorismus* (engel. Orig. 1934), Frankfurt a. M. 1968.〔河村望訳『デューイ＝ミード著作集3　精神・自我・社会』人間の科学社，1995年.〕

Mollenhauer, Klaus u. a.: *Grundfragen ästhetischer Bildung. Theoretische und empirische Befunde zur ästhetischen Erfahrung von Kindern*, Weinheim [u. a.] 1996.

Müller, Hans Rüdiger: *Ästhesiologie der Bildung. Bildungstheoretische Rückblicke auf die Anthropologie der Sinne im 18. Jahrhundert*, Würzburg 1998.

Parmentier, Michael: *Ästhetische Bildung*. In: Benner, Dietrich/Oslkers, Jürgen (Hg.), Historisches Wörterbuch der Pädagogik, Darmstadt 2004, S. 11–32.

[32] Plessner, VIII, 338.

Plessner, Helmuth: *Die Grenzen der Gemeinschaft. Eine Kritik des sozialen Radikalismus* (1924), In: Ders., Gesammelte Schriften. Hrsg. v. Günter Dux, Odo Marquard und Elisabeth Ströker, Bd. 5, Frankfurt a. M. 1981, S. 7–134.

Plessner, Helmuth: *Der kategorische Konjunktiv. Ein Versuch über die Leidenschaft* (1968). In: Ders., Gesammelte Schriften. Hrsg. v. Günter Dux, Odo Marquard und Elisabeth Ströker, Bd. 8, Frankfurt a. M. 1983, S. 338–352.〔谷口　茂訳「五　断定的接続法—情熱についての一試論—」『人間の条件を求めて—哲学的人間学論考』思索社，1985年，171–190頁.〕

Plessner, Helmuth: *Zur Anthropologie des Schauspielers* (1948). In: Ders., Gesammelte Schriften. Hrsg. v. Günter Dux, Odo Marquard und Elisabeth Ströker, Bd. 7, Frankfurt a. M. 1982, S. 399–418.

Plessner, Helmuth: *Unmenschlichkeit* (1967), In: Ders., Gesammelte Schriften. Hrsg. v. Günter Dux, Odo Marquard und Elisabeth Ströker, Bd. 8, Frankfurt a. M. 1983, S. 328–337.

Plessner, Helmuth: *Die Sphäre des Menschen—Die Positionalität der exzentrischen Form. Das Ich und der Personcharakter*, In: Ders., Gesammelte Schriften. Hrsg. v. Günter Dux, Odo Marquard und Elisabeth Ströker, Bd. 4, Frankfurt a. M. 1981, S. 360–365.

Rittelmeyer, Christian: "*Über die ästhetische Erziehung des Menschen*". *Eine Einführung in Friedlich Schillers pädagogische Anthropologie*, Weinheim, München 2005.

図　　版

図 1: Etienne-Maurice Falconet: *Pygmalion und Galatea*, Marmor, 1761; Paris, Musée du Louvre, Inv.-Nr. R. F. 2001; Abbildung entnommen aus: Mehr Licht. Europa um 1770. Die bildende Kunst der Aufklärung, Ausstellungskatalog, Städelsches Kunstinstitut Frankfurt, hrsg. v. Herbert Beck, Peter C, Bol und Maraike Bückling, München 1999.

図 2: Paul Cézanne: *Die Montague Sainte-Victoire, von Les Lauves aus geseben.* 1904/06, Öl auf Leinwand, Privatbesitz; entnommen aus Cézanne, Paul: Bilder eines Berges, München, Zürich 1990.

図 3: Paul Cézanne: *Die Montague Sainte-Victoire, von Les Lauves aus geseben.* 1902/1904, Öl auf Leinwand, Philadelphia Museum of Art, George W.

Elkins Collection; entnommen aus Cézanne, Paul: Bilder eines Berges, München, Zürich 1990.

図 4: Paul Cézanne: *Die Montague Sainte-Victoire, von Les Lauves aus geseben.* 1902/1906, Öl auf Leinwand, Kunsthaus Zürich; entnommen aus Cézanne, Paul: Bilder eines Berges, München, Zürich 1990.

図 5: Edvard Munch: *Selbstbildnis. Zwischen Uhr und Bett*, um 1940, Munch-Museet Oslo; entnommen aus: Edvard Munch: Ramerding 1987.

※ Der vorliegende Text ist in der Originalausgabe als Beitrag in dem Buch: "*Schillers ästhetisch-politischer Humanismus.*" Herausgegeben von Fuchs, Birgitta und Koch, Lutz im Ergon-Verlag Würzburg erschienen.

©2006 by Egon Verlag Dr. H.-J. Dietrich, Würzburg, Germany.